

# 指導医に聴く

## 「私が研修医だった頃」

第 3 回 岩国医療センター臨床研修部長  
藤本 剛 先生

と き 平成 29 年 12 月 11 日 (月)

ところ 岩国市内

[聞き手：常任理事 藤本 俊文]



**藤本常任理事** 県医師会報の連載「指導医に聴く『私が研修医だった頃』」の第 3 回目として、岩国医療センター臨床研修部長の藤本 剛 先生にお話を伺いたいと思います。本日はご多忙のところ、インタビューの時間をいただきまして誠にありがとうございます。

先生は岩国市出身で平成 7 年に島根医科大学を卒業後、岡山大学第一内科に入局され、半年後から三豊総合病院内科（香川県）に 3 年間、柏原赤十字病院（兵庫県）に 2 年間、国立岩国病院内科に 1 年間勤務されてから岡山大学消化器内科に復帰され、学位取得後、津山中央病院内科で 3 年間の後、現在の岩国医療センター内科に着任されたと伺っております。

まず、そのご経歴の中で感じたこと、これから研修医の方に伝えたいことをお聴かせ願います。

**藤本先生** 関連病院の中でも研修した病院は医局では「三大野戦病院」ともいわれる病院で、臨床の基本を学び、圧倒的多数の症例を経験させていただきました。手技や処置だけでなく、ER も十分に経験できたことが、その後の自信につながったと考えています。自己流の解釈では野戦病院は夜戦病院、つまり医局の夜の灯りが消えることがない病院をいい、多数の重症救急患者を受け入れ、夜がない病院を意味していると考えています。

**藤本常任理事** 専攻科（入局）を決めるきっかけは何だったのでしょうか。

**藤本先生** きっかけは特になく、大学卒業時に何となく内科入局を決定し、身内の病気がきっかけで消化器内科を専攻することになりました。よく仕事をする上司が多かったので、滅私奉公？を教わりました。そのとき「働きバチ遺伝子」を組み込まれたかもしれず、周囲の雰囲気もそんな風で、官舎と病院との往復で、朝も昼も夜中も元気に働いてしまう生活でしたが、悔いはありません。

**藤本常任理事** 思い出に残る患者さんは居られますか。

**藤本先生** 1 人目は大学から赴任した三豊総合病院（香川県）で最初に担当した患者さんはパラコート中毒で、ICU 管理し、奇跡的に軽快退院されました。2 人目は最初の当直での救急搬送で入浴中の心停止での CPA でした。そのため死亡診断書を書いたことはないのに死体検案書を作成することになり、インパクトの高い研修スタートで前途多難の予感がありました。3 人目は四国のお遍路さんの途中で急性心筋梗塞を発症した女性、自分と上司が心カテして PCI 施行、軽快退院し、今でも徳島から便りがあります。4 人目の高齢男性は狭心症で、担当した自分が心カテして三枝病変を

診断、CABG の適応ありでしたが、自分が行った EGD で進行胃癌を発見という、たまたまではありませんが循環器・消化器疾患を一人で担当し、バイパス後に胃全摘の手術をすることとなった例など忘れられない患者さんです。研修医の皆さんもきっと心に残る患者さんが出てくることと思いますが、そういった患者さんが自分を育ててくれたと信じています。

**藤本常任理事** これまで良かったことを挙げていただけますか。

**藤本先生** 自分を支えてくれる多くの先輩・同僚・後輩・スタッフがいて、また、多忙な自分を理解し支えてくれる妻に出会えたことです。そして、内視鏡検査で私を指名して下さる患者さんがいることです。しかし、自分では技術的には完成に至らず、まだ道半ばの印象です。逆に辛かったことは昔話になりますが、眠れない当直明けで終日検査？外来診療があったことが一番です。また、家庭に考慮せずに仕事をし過ぎてしまって、長男は 3 歳頃には「重症」「急変」「ムンテラ」「緊急内視鏡」を理解していた様子で、これらの単語は私を家庭から容易に奪ってしまうものであったと思っています。

**藤本常任理事** 現在の研修医制度については、どのように思われていますか。

**藤本先生** 平成 16 年の制度開始時は、高い理想を掲げプログラムを充実させ実行に移す気運がありよかったと思います。専門に入る前のプライマリケアが重要視され一定の効果はありました。しかし、現在は研修医の多様性に必ずしも対応しておらず、専門性に特化したい希望の強い研修医には数多いローテートは負担となっているように思います。最低限の共通分野は経験すべきですが、プログラム上、抜け穴もあり問題であると思います。産婦人科・小児科・外科は目標や評価項目では必須ですが、ローテート義務なく選択となっており、当院では産婦人科・小児科は必須としています。涵養という言葉が形骸化し、専門医取得に

ウェイトがかかると初期研修は単なる通過期間となり、以前より軽視されるのではないかと懸念しています。

**藤本常任理事** 新専門医制度については、いかがですか。

**藤本先生** 研修医の大病院集中の傾向は否めないとはいえません。当院は内科と総合診療が基幹施設となっており、初年度は具体的ビジョンを示してリード（入局や大学院も含め）できた施設に集中しています。内科志望者は減少傾向なのか？平成 29 年は広島大学 43 人・岡山大学 3 人・山口大学 11 人（29 年 11 月 15 日 1 次選考の内科プログラム結果判明分）と格差があり、これも問題です。

**藤本常任理事** 次に地域医療についてお聴かせ願えますか。

**藤本先生** 岩国では急性期治療が当院に集中しているため、負担が多く、不満があるのは事実です。「休日夜間は何かあれば国病（岩国医療センター）へ！」この文化がかなりの負担となっています。また、医師会病院の機能低下もこれに拍車をかけています。患者さんの啓蒙もしてきましたが、市町村が中心となり、当院の負担を皆でシェアする具体的方策と実行力が必要だと思います。高齢者はますます増加し、急性期診療後の受け皿となる医療機関が必要です。超高齢・基礎疾患多数でほぼ DNAR の患者さんが、相変わらず搬送されて来ます。施設での対応困難が理由ですが、お看取り決定ならば高度救命施設への救急搬送は無意味では？と思います。一朝一夕には解決しない問題とは思いますが。

**藤本常任理事** 最後に、研修医へのメッセージをお願いします。

**藤本先生** 月並みですが、「若い時の苦勞は必ず役に立つ」と思います。医師は最初の 5 年でその基礎が形成されます。リサーチマインドを持ち、

疾患ではなく「病気を持つ人」を診ることができ  
る医師になってほしいです。自己を堅持しながら  
バランス感覚も大事と思います。将来は「偉くなっ  
てほしいが、エラそうになってはほしくない！」  
ということ、当院を修了した研修医には毎年言  
い続けています。

先生の人柄により、最初から打ち解けてのインタ  
ビューになり、楽しくお話を聞くことができたこ  
とに感謝申し上げるとともに、先生の今後ますま  
すのご活躍を祈念しましてインタビューを終わら  
せていただきます。

**藤本常任理事** 本日は大変貴重なお話をお聞かせ  
いただきまして、誠にありがとうございました。

## 『若き日（青春時代）の思い出』原稿募集

### 投稿規程

字数：1 頁 1,500 字程度

- 1) タイトルをお付けください。
- 2) 他誌に未発表のものに限ります。
- 3) 同一会員の掲載は、原則、年 3 回以内とさせていただきます。
- 4) 編集方針によって誤字、脱字の訂正や句読点の挿入等を行う場合があります。また、送り仮名、数字等に手を加えさせていただくことがありますので、ある意図をもって書かれている場合は、その旨を添え書きください。
- 5) ペンネームでの投稿は不可とさせていただきます。
- 6) 送付方法は電子メール又は CD-R、USB メモリ等による郵送（プリントアウトした原稿も添えてください）をお願いします。
- 7) 原稿の採用につきましては、提出された月の翌月に開催する広報委員会で検討させていただきますが、内容によっては、掲載できない場合があります。

#### 【原稿提出先】

山口県医師会事務局 広報・情報課

〒753-0814 山口市吉敷下東 3-1-1 山口県総合保健会館 5 階

TEL：083-922-2510 FAX：083-922-2527

E-mail kaihoh@yamaguchi.med.or.jp